

08

「小説」

タグ

映像メディア学科・教授

大島 龍彦

今日は朝から生憎の雨。マンションのエントランスを出て空を見上げる。梅雨明けはまだのようだ。お気に入りのブラウンの傘をひろげ、隣接する女子校に沿った歩道を地下鉄の駅に向かう。寂しげな雨のためか、人の姿はまばら。街路樹の葉が心なしかうつむいて見える。

途中電車を乗り換え、T駅で下車。公園口より南へ少し歩いたところに、氏家穂波が勤めている図書館がある。

開館は大正十二年の十月と古い。が、現在の図書館は、昭和五十九年四月に建設され、百万冊以上の本が収容できるという書庫のある立派なものだ。外観を茶系で統一された図書館は、千二百本はあるという公園の雨に洗われた葉桜に包まれていた。

勤め始めて二年目の穂波は、今年の三月まで一階のフロアを担当していた。実用書や児童図書の他に、DVDなどの視聴覚資料なども提供してきた。穂波も時々好きな映画や本を借りてきては、今も楽しんでる。

この四月から穂波は二階のフロアに移動。来館者の質問や依頼に加え、外部からの

手紙やファックス、それに電話。最近は特に電子メールでの質問や依頼に一喜一憂する毎日だった。それでも七月の上旬になると、ようやく利用者の応対にも少しゆとりが出てきた。

今日も図書館は、整然と並んだ書庫や書架に納められている約百万冊の本たちが、静かに来館者を待っている。咳払いさえ気が引けるこの静寂。もしかしたら図書館の主は、この静けさかも知れない。

氏家穂波は勝手に制服と決めている服に着替え、エプロンをしてカウンター業務に就いた。開館はいつものように九時三十分。天気がいい日曜日には、開館前から行列ができる。が、今日は生憎の雨。それでも、開館と同時に丸めた傘を専用のビニール袋に入れながら、人々が無言で入ってくる。

受験を控えた高校生たちは、自習室に消えて行き、園児を連れた母親は、キッズコーナーへ迷わずに行く。作業服姿の中年男性は、県下の詳細な地図に目を通しながらコピー機に向かう。

最近、三十代前後と思われる背の高い男性が、毎週土、日に訪れては、二階のフロアに設置されている机に座り、何やら思索にふけっている。時折キーボードを叩きながらパソコンの画面に見入っている。その横顔が……、ちよつと気になる。が、声をかける勇気はない。それから、垢抜けない服装をした年齢不詳の人たちが、所々に設置されている椅子に座り、「ここは自分の指定席」とばかりに陣取って、うつらうつらと舟を漕いでいる。不思議なことに男性が多い。

「あのお爺さん。今日は来なかつたけれど元気かしら……」と思ひながら、穂波は本日の業務を終了。外に出ると、雨は上がっていた。

明日の月曜日は休館日。久しぶりにM百貨店で母とお買い物の予定だ。

2

「白いリボンが素敵！」

ここ数ヶ月、穂波はM百貨店の土、日の喧噪を知らない。平日の婦人服売り場は客の数より店員の方が多い、そんな気がする月曜日の昼下がり。リボンが可愛いシフォンのブラウスの裾を穂波が摘むと、スタイリッシュにコーディネートされたマネキンの袖が涼しげにふわりと揺れた。

「身ごろに裏地が付いているのもいいわね」

下着が透けて見えるのは下品だ、という母らしい発言に、穂波は思わず苦笑する。

「カジュアルにも着られそうだね」

「サイズは？」

身長百六十四センチの穂波は、メーカーによってMかLかでいつも迷う。が、試着すると

詭えたように身体にフィットした。

「腕が見え過ぎないかしら？」

穂波は鏡に映った自分の姿を凝視した。学生時代に比べ、ここ数ヶ月、腕のたるみが気になつて仕方がない。

「大丈夫。よく似合っているよ」

母は鏡の中の穂波に、そう言つて笑つた。

試着室の中でシフォンのブラウスを脱ぎ、二枚折りになつたピンクのハートマークのタグを開く。なんと「MADE IN JAPAN Price 70% OFF」とある。製法がしっかりしている日本製が70%OFF。これは魅力だ。もちろんデザインも着心地も大事。

穂波はこれが第一候補だとは思ふものの、C店で見たフルボウタイのシフォンのブラウスも気になる。二の腕を隠す七分袖。先程C店の店員が言つていた言葉も気に掛かる。

「すとした落ち感が何とも言えません。リボンは取り外し可能で、年中着られるアイテムです」

縮まり屋の穂波にとつて、一着で二様の着こなしができるのはお得だ。

「お客も少ないんだから慌てずゆっくり選んだら」

穂波は母と腕を組みながら、もう一度C店に向かった。

途中、T店のカジュアルなデザインのワンピースが気になる。しつとりとしたハリのある質感がいい。清々しくて上品だ。

「いつも同じ様なものばかりだからたまには」

母の言葉にちよつと立ち寄る。

タグには「綿100%」とある。しわになりやすく、縮みやすいという綿特有の欠点が気になるが、「ワンピースとしてはもちろん、一枚の羽織りものとしても使えます」と言う一着二様の着こなしができるお得感が、穂波の視線をくすぐる。

その上、裾に向かって僅かだが台形ラインになっているのも魅力だ。脚を実際より細く見せるからだ。母には欠かせないベチコートも付いている。

「カラーはこのワインレッドですか？」

「済みません。このマネキンの一着しかないんです」

店員の話だと、ネイビーやベビーピンクなどが日曜日の午前中まではあつたらしい。

「たまには違った色もいいもんだよ」

母が試着を勧めるので袖を通す。着心地は悪くない。悪くないどころか暑い日もさらりと快適に過ごせそうだ。ただ、色が……。穂波はこれを第三候補と決め、C店に向かった。

「穂波、彼氏はまだできないの？」

突然、歩きながら母が言った。

「お父さんが気になっているみたいなの」

「残念だけど、いないわ」

穂波は高校二年生の時、失恋して以来、彼氏はいなかった。

「気になっている人もいないの？」

「そうね……。今は仕事でいっぱい……かな」

ふと、穂波の脳裏に、土、日に図書館に通ってくる男性の横顔が浮かんだ。「今度、声をかけてみようかな」と思ったが、母には黙っていた。

C店でフリルボウタイのシフォンのブラウスを試着する。二の腕は見えない。が、鏡に映った七分袖が気になった。袖口のステッチが垢抜けないような気がするのだ。

タグには「表地・本体：ポリエステル100%・裏地：ポリエステル100%・伸縮性無し」とある。N店の第一候補と同じだ。もう一枚のタグには「生産国MADE IN CHINA price 50% OFF」とある。最近の中国製も日本製に負けてはいない。が、穂波は70%OFFの日本製を買うことにしてN店に向かった。

「えっ！ 売れちゃったんですか？」

N店の店員は、ピンクの小さな花柄のワンピースを、マネキンに着せながら在庫も無いと言う。穂波は店内のハンガーにぶら下がっている幾つかの服を手にとってみるが、どれも心を打つものがない。

「七分袖のブラウスもいいと思うけど」

母は手に持ったロングスカートを、自分の腰に当てながら言う。

「裏地もさらつとしていて伸縮性があるし、ウエストがゴムというのがいいわ」

母が購入したスカートの包装を待つてC店に向かう。

途中、T店の前を通る時、母がハリのある質感のいい第三候補のワンピースを買ってくれと言おう。穂波は思い切つてワインレッドに挑戦することにした。初めての挑戦で、ちよつとドキドキする。包装を頼んでC店に向かう。

C店のマネキンは、胸元にフリルの付いた七分袖のシフォンのブラウスを着ていた。

支払いを済ませ、通路まで出て来た店員に見送られ、T店のワンピースを取りに行く。

「お父さん、今日、会議で遅くなるつて。夕食、外で食べようか？」

それもいいなとは思ふものの、思わぬ出費をさせてしまった穂波は、先日、博多のお土産にと、父が買ってきた辛子明太子でお茶漬けを提案し、二人は地下鉄の駅に向かった。

3

午後五時の藤が丘行きの地下鉄は、思いのほか空いていた。

「日本製が70%OFFなんて信じられない」

席に座ると同時に、穂波は第一候補だったピンクのハートマークのタグが付いた、白いリボンのシフォンのブラウスを思い出した。

「70%OFFにはそれなりの訳があるのよ」

どんな訳があるのか解らないが、母にはつきりそう言われると、穂波は「そうだな」と思う。買った七分袖のシフォンのブラウスは第一候補より三千円程高かったが、腕の太さは気にならないし、ボウタイを外して二様に着ることもできる。二着買ったと思えば安いものだ。

母に買ってもらったワンピースだって、一枚の羽織りものとして使えば二着買ったことになる。ワインレッドは初めての挑戦で、ちよつとワクワクする。

穂波は、どちらをどのように着ていくのか、あれこれ想像していると、明日の火曜日が待

ち遠しくなった。

自宅の玄関に着くと電話が鳴っていた。慌てて鍵を開け、母が電話に向かう。穂波は母が脱ぎ散らかした靴を揃え、リビングへ。

「穂波、ちよつと頼まれてくれない？」

会議の中止で父が帰ってくるのだという。二人とも買い物に夢中で父からの携帯メールに気がつかなかったのだ。

穂波は買ってきた服を慌てて自室のクロークに吊し、母がクリアケースの中から取り出した用紙を二枚持つて、買い物に出た。

どうやら母は、豚とレタスの蒸ししゃぶサラダと、オクラとミョウガの和え物を作るつもりらしい。それから、父の大好きなアジの塩焼きだ。

穂波は部屋着に着替えると、母に言われるまま買ってきた豚肉を半分にし、ミョウガを千切りにした。それから、アスパラの根元の皮をピーラーでむいて三等分にし、縦に二つに切ったところへ父が帰ってきた。

父がお風呂に入ると、母は早速、和え物を作り、アジの塩焼きに取りかかった。

母はアジのおなかに迷わず切り込みを入れると、エラと内臓を丁寧に取り除いた。

「穂波、ほら、ここも忘れずに切り落とすの」

母は包丁の先でゼイゴを指し示しながら、さつと切り落とした。

「おなかの中と全体をきれいに水洗いしたら……、穂波、そのキッチンペーパーを取つてくれる」

穂波はペーパースタンドから、二枚切り取ると母に渡した。

「美味しい焼き魚はね、水気を丁寧にふき取ることが大切なの」

母はキッチンペーパーを四つ折りにすると、おなかの中の水分を、そうつと拭き取り、魚の両面にも軽くペーパーを当てた。それから側面に十文字の切り込みを入れると、少し高い位置から、ほどよいがりの残っている伯方の塩を両面に振った。

穂波は出来上がった和え物と冷蔵庫から取り出したビールを食卓に並べた。

ちよつとそこへ、父が頭をバスタオルで拭きながら風呂場から出て来て、テーブルの上のビールの栓を抜いた。

「先に食べてもいいかな」

父は母の返事を待たずにグラスに注いだビールを一気に飲んで、「プハー。美味しい！」と言ひ、和え物を口にした。

母は、「焦げやすいから」と言つて、アジの胸ひれと尾びれにアルミホイルを丁寧に巻き、グリルに入れると食卓についた。

父があまりにも美味しそうにビールを飲むのを見た母は、「私もいたどころかしら」と、厨房の食器棚に立った。立ったついでにグリルのアジの焼け具合を確認し、「あと五分かな」と言いながら食卓に戻ってきた。

「客寄せの目玉商品だな」

父はタグにあった日本製が70%OFFの訳をそう分析し、母が持ってきたグラスにビールを注いだ。一瞬、穂波の脳裏にピンクのハートマークのタグがよぎった。

証券会社に勤めている父は、夕刊に目をやりながら、「イギリスがEUに加盟しながら通貨ユーロに参加しなかったのは正解だったな」と言う。

「消費税は今後、十パーセントになるのかしら？」

母はEU加盟国の経済問題より、家計に直結する国内問題に興味があるようだ。

「馬鹿げた為替介入やアメリカへの短期貸し付けで、現金化出来る資産が日本には一〇〇兆円以上もあるんだ。だから今すぐ消費税をあげる必要なんか、どこにもないんだ」

父は語気をちよつと強め、グラスに半分ほど残っていたビールを一息に飲んで続けた。

「政府系機構を縮小し、天下りを無くせば当分の間、消費税を徴収する蓋然性はないんだ」

父の怒りが某党の公約違反におよぶと、突然、「しまった！」と言って、母は慌てて厨房に行った。が、「ああ、良かった」と言う声が出て、アジの塩焼きが運ばれてきた。

「日本政府の総負債が一〇〇〇兆円前後。確かにこれは大変なことだ。テロ対策にしたつ

て、何処まで進んでいるのか、国民にはさっぱり解らん」

その間も父の怒りは収まりそうにない。が、お皿に盛りつけたアジの塩焼きを見ると、父はニコしながら、「母さんのアジの塩焼きは絶品だ」と言つて、大根おろしにレモン汁をかけると美味しそうに食べ始めた。

「明日は晴れるかな？」

穂波は天文学的な数字の意味が理解できないまま、明日の天気が気になった。

父は二つ折りになっていた夕刊を拡げ、天気予報を目で追いながら言った。

「曇り、時々雨だ」

食後、リビングのソファで焼酎のロックをちびりちびりとやり始めた父の横で、母はのんびり洗濯物を畳み始め、穂波は今日買った服は晴れの日に着ていくことにして、食器の洗い物を担当した。

それから、穂波は早々にシャワーを浴びると、自室に籠もり、借りてきたガス・ヴァン・サント監督の映画『小説家を見つけたら』をセットした。

文学好きで、プロのバスケットボール選手を夢見る少年、ジャマルと伝説の小説家との文章を通して友情が芽生えていく物語だ。幻の小説家ウィリアム・フォレスターを演じるシヨーン・コネリーの洪さがたまらない。時々、穂波は自分に彼氏が出来ないのは、この「洪さ」好みが災いしているのだと思う。三つや四つの年上では何かもの足りない。まして同年代は恋愛の対象外だ。

『小説家を見つけたら』を見終わったのは夜の十一時半。

「自分のために書く文章は人に見せるための文章に優る」

老作家が少年にアドバイスするセリフの一つだ。幾つもの名セリフが自分へのアドバイスのような気がして、穂波の目が冴える。仕方がないからサイドテーブルに手を伸ばし、お気に入りの本を取る。

『赤毛のアン』をベッドに潜り込んで読んでみると、「どうせ空想するなら、思いきりすばらしい想像にした方がいいでしょう？」とアンが言う。

穂波は本を閉じて思いっきりすばらしい想像をすることにした。

晴れた日にワインレッドのワンピースを着て、小説家のウィリアム・フォレスターとデートをするのだ。

4

「穂波、ほら、起きなさい。仕事に遅れるわよ」

母がカーテンを開けると朝陽がまぶしい。「はっ」として時計を見る。七時四十分だ。慌ててブルーベリージャムを塗ったトーストを一口頬ばり、洗面所でブラッシング。スプレーで寝癖を落ち着かせると、持ってきたミルクティーを一口飲んで顔を洗う。母は座って食べなさいと言いが、そんな時間はない。保湿系の化粧水を塗って、トーストを一囓り。ファンデーションを薄く塗り、ルースパウダーは時間がないから今日はパス。眉毛を描き、アイシャドーを薄く伸ばす。歯磨きもそこそこに、リップを引いて十五分。穂波は迷わずワインレッドのワンピースを手を取った。

マンションのエントランスを出ると、穂波は当てにならない天気予報に感謝して駅に向かった。万緑の桜並木からこぼれ落ちる陽の光に混じって聞こえてくるチチピー、チチピーと鳴くのは山雀のようだ。その山雀の鳴き声に合わせてティヒー、ティヒーと鳴くのは小雀に違いない。すれ違った二人の女子高生のおしゃべりは、まるで五十雀のよう。公園の柳の枝が揺れて、ブランコのきしむ音がする。小学校の校門に立つ警備員さんに挨拶する子どもたち。

時折まとわりつくワンピースの裾のさらさら感が心地いい。私の脚はいつもより、きつと細く見えているに違いない。思い切つてチャレンジしたワインレッド。もしかしたら夢の続きが見られるかも知れない。

菊坂町の交差点を右に曲がると、駅に向かう人たちが足早に歩いていた。腕時計は八時を過ぎている。

颯爽と前を行く女性のシフォンのブラウスの袖が揺れて涼しげだ。上品でエレガンス。

——えっ！ もしかして……。

昨日、第一候補にあげた、あの服のようだ。少し近づいて見る。やっぱりあの服だ。本当なら私が着ていたはずの白いリボンのシフォンのブラウスだ。

——ちよつと……、何てこと！

タグを付けたままだ。ハートの形をした二つ折りのピンクのタグが襟から出ている。

教えてあげなくっちゃ。けれど何かが引つかかる。素直に教える気持ちになれないのは何故？ 何度も何度も吟味して出した結論が、既に誰かのものになっていた時のショックが大きかったから？ 私よりちよつとはかりスタイルがいいから？ 指摘された時の恥ずかしさが解るから？

——まさか……。

恐る恐る伸ばした穂波の右手に……、タグだ。私もタグを付けている。穂波はそのまま手のひらを襟に当て、駅のトイレに急いだ。

誰もいないのを確認し、鏡に映ったタグを、そつと引張ってみる。が、外れない。何回外そうとしても外れない。仕方がないからボックスに駆け込んでワンピースを脱ぎ、丁寧にタグを取っていると突然、「彼女は私だ」と思った。

彼女も仕事休みの月曜日。楽しみにしていたお買い物。きつと久しぶりのことだったに違いない。これにしようか？ あれにしようか？ 迷った末に決断したのが私よりほんの少し早かっただけ。きつと彼女も今日の天気喜んで、慌てて着替えてきたのに違いない。そう思うと穂波は教えてあげなければと、駅のホームに急いだ。

プラットホームの反対側に女性を発見。スーツ姿の背の高い男性が近寄って、何やら声をかけている。彼女は驚き、右手でタグを確認し、慌てて取ろうとして取れないでいる。

「まもなく電車が到着いたします。白線まで下がってお待ちください」

構内放送が終わると電車が入ってきた。急かされて乗った地下鉄の女子高生の肩越しに、タグを外してもらっている彼女の姿が見えた。うつむいてはいるものの、どことなく嬉

しそうだ。

背の高い男性の横顔に見覚えがあった。図書館の彼だ。毎週土、日に訪れて、なにやら思索にふけてはキーボードを叩いている、あの男性だ。

穂波は一瞬、「自分もタグを外さなければ良かったかな」と思った。と同時に発車のベルが鳴った。

了

(平成二十七年十二月十五日脱稿)

novel Tag

Department of Visual Media • Professor
Tatsuhiko OSHIMA